

再会の準備

丸山 勉

【聖書】創世記 44 章 14～18、30～34 節

ユダと兄弟たちがヨセフの屋敷に入っていくと、ヨセフはまだそこにいた。一同は彼の前で地にひれ伏した。「お前たちのしたこの仕業は何事か。わたしのような者は占いでることを知らないのか」とヨセフが言うと、ユダが答えた。「御主君に何と申し開きできましよう。今更どう言えば、わたしどもの身の証しを立てることができましよう。神が僕どもの罪を暴かれたのです。この上は、わたしどもも、杯が見つかった者と共に、御主君の奴隷になります。」ヨセフは言った。「そんなことは全く考えていない。ただ、杯を見つけられた者だけが、わたしの奴隷になればよい。ほかのお前たちは皆、安心して父親のもとへ帰るがよい。」ユダはヨセフの前に進み出て言った。「ああ、御主君様。何とぞお怒りにならず、僕の申し上げますことに耳を傾けてください。あなたはファラオに等しいお方でいらっしゃいますから。

今わたしが、この子を一緒に連れずに、あなたさまの僕である父のところへ帰れば、父の魂はこの子の魂と堅く結ばれていますから、この子がないことを知って、父は死んでしまうでしょう。そして、僕どもは白髪の父を、悲嘆のうちに陰府に下らせることになるのです。実は、この僕が父にこの子の安全を保障して、『もしも、この子をあなたのもとに連れて帰らないようなことがあれば、わたしが父に対して生涯その罪を負い続けます』と言ったのです。何とぞ、この子の代わりに、この僕を御主君の奴隷としてここに残し、この子はほかの兄弟たちと一緒に帰らせてください。この子を一緒に連れずに、どうしてわたしは父のもとへ帰ることができましよう。父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません。」

【序】8月15日を迎えて

先週、74 回目の敗戦記念日を迎えました。戦争とは、前線に赴く当事者たちだけでなく、その兵士とされた者はもちろん、それに繋がる家族たちにも大変なストレスや絶望感、無力感、悲しみ、また悔いのような心、しこりを残すものなのだと思います。そこで「死」を体験してしまう、命を落としてしまうということは、何にもまして重たいことですが、もしかしたら家族や愛する者を失い、残された者は、その大きな悲しみや苦しみ、答えの出ない問いをずっと、一生持ち続ける訳ですから、それは本当に大変なことなのだと思います。

そして、私たちの人生というのも、戦争中でないにしても、様々な人間関係、家族関係、或いは環境の変化などによって、いつしか、自分では抱えきれない重たい現実を負わされるということが、好むと好まざるとにかかわらず有り得るのだと思います。旧約聖書・創世記に記されている、ヨセフという人の人生もそうであったのではないのでしょうか？

[1] ヨセフの数奇な人生

今日は創世記の 44 章から読んで頂きました。今ヨセフは、ここエジプトの地にあって、宰相になっています。彼の人生は数奇な人生と言えます。今、彼は恐らく 40 才位です。振り返ってみますと、まだ少年であった 17 才の時、ヨセフは 10 人のお兄さんたちの反感を買い、一度殺されかけかました。しかし命まで取ることは気が咎め、兄たちは穴の中にヨセフを閉じ込めたのです。しかし、その穴の中のヨセフを、兄たちが気付かぬ内に通りかかったミディアン人の商人がを見つけ、ヨセフを、イシュマエル人に売ってしまい、彼は異国、エジプトに運ばれてしまったわけです。兄たちは慌てましたが、残されたヨセフの晴れ着に雄山羊の血を塗り、父親にそれを見せ、彼が獣に殺されてしまったことにする芝居まで打ちます。

そしてヨセフですが、不思議なことにエジプトで初めは、王ファラオの役人に仕える奴隷であったのですが、この役人ポティファルがヨセフに目をかけて、その家と財産の管理をすっかり任せるまでになったのです。それを聖書は、「**主が彼と共におられ、主が彼のすることをうまく計らわれた。…主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福された**」と書いています (39:3、5)。しかしその後、こともあろうにその妻の誘惑と策略に会い、潔白であるにも拘わらず、王の囚人たちが入る監獄に入れられたのです。

しかしその中でも神様はヨセフに恵みを施し、その監獄の長がヨセフを認め、囚人たちのことをヨセフに任せました。監獄にありながらです。不思議です。そして、そこで彼の**神様から与えられた賜物**——夢を解くという——が生かされ、それが**王様ファラオ**の耳に届き、夢の意味に悩まされていた王に鮮やかにその夢の意味を解き明かしました。それが 41 章に記されていました。かくして、王は、このヨセフを**エジプト全国の宰相**に抜擢するのです。

今、ヨセフの夢の解き明かしの通り、**7 年間の豊作の後、7 年間の飢饉**がやって来て、それはエジプトを超え、世界各地に及びました。そしてここに至って、カナンに住んでいる**ヨセフの兄たち**が、**父ヤコブ**に促されてはるばる食糧を得るためにエジプトにやってきます。そこで、今や宰相になり、穀物の監督もしていたヨセフと会うことになるのです (42:6)。この時は、同じ母ラケルから生まれた、ヨセフの**弟ベニヤミン**は同行していません。父ヤコブが彼の身を案じたからです。いずれにせよ、ヨセフが 17 才で売られてから、20 数年の歳月が流れ、この兄弟たちは再会したのです。兄たちは、ヨセフの前にひれ伏しました。あの少年の時のヨセフの夢の通りですね。しかしこの時、ヨセフ自身は「アッ、自分の兄たちだ」と分かりましたが、兄たちは、まさか今ひれ伏している者が弟ヨセフだとは思っていません。

ヨセフは食料を与えますが、帰りがけにこの兄たちに難題をふっかけるのです。「一番末の弟（ベニヤミン）をここに来させよ」（42:15）と。そして 43 章では、兄の一人ユダ父ヤコブを何とか説得してベニヤミンを同行させます。ヨセフはベニヤミンと対面します。本当に、愛する「弟懐かしさに胸が熱く」なりますが、兄弟たちが食料を積んで帰っていく時、ヨセフは自分の執事に命じてベニヤミンが盗みを働いたように罫を仕掛け、罰としてベニヤミンを私の奴隷としなさい、あなたたちは帰って良いと言うのです。そこで、困ってしまったユダは、ヨセフに直々に嘆願するのです。それが本日の聖書箇所です。

[2] ユダの心からの嘆願

44:18 以下を少しお読み致します。ユダは身を低くして、丁寧に語っています。—「ユダはヨセフの前に進み出て言った。「ああ、御主君様。何とぞお怒りにならず、僕の申し上げますことに耳を傾けてください。あなたはファラオに等しいお方でいらっしゃいますから。」少し飛ばして 22 節以下をお読みします。

「わたしどもは、御主君に、『あの子は、父親のもとから離れるわけにはまいりません。あの子が父親のもとを離れれば、父は死んでしまいます』と申しましたが、あなたさまは、『その末の弟と一緒に来なければ、再びわたしの顔を見ることは許さぬ』と僕どもにおっしゃいました。わたしどもは、あなたさまの僕である父のところへ帰り、御主君のお言葉を伝えました。そして父が、『もう一度行って、我々の食糧を少し買って来い』と申しました折にも、『行くことはできません。もし、末の弟と一緒になら、行って参ります。末の弟と一緒にないかぎり、あの方の顔を見ることはできないのです』と答えました。すると、あなたさまの僕である父は、『お前たちも知っているように、わたしの妻は二人の息子を産んだ。ところが、そのうちの一人はわたしのところから出て行ったきりだ。きつとかみ裂かれてしまったと思うが、それ以来、会っていない。それなのに、お前たちはこの子までも、わたしから取り上げようとする。もしも、何か不幸なことがこの子の身に起こりでもしたら、お前たちはこの白髪の父を、苦しめて陰府に下らせることになるのだ』と申しました。

…そしてユダは、自分が弟ベニヤミンの代わりにになります、と言うのです。33 節。「何とぞ、この子の代わりに、この僕を御主君の奴隷としてここに残し、この子はほかの兄弟たちと一緒に帰らせてください。この子を一緒に連れずに、どうしてわたしは父のもとへ帰ることができましょう。父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません。」

これは、覚悟の一言です。実はユダも、ヨセフのことでは、解決できないものを抱えていました。42:21 にこうあります。—「ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうとしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった。」

さらに、今日の 44 章の前半の、ベニヤミンが訴えられた時にはこうあります。16 節。「御主君に何と申し開きできましょう。今更どう言えば、わたしどもの身の証しを立てることができましょう。神が僕どもの罪を暴かれたのです。この上は、わたしどもも、杯が見つかった者と共に、御主君の奴隷になります。」

ここでユダは、この一連の出来事の中に、神様の介在というものを感じているのですね。「神が僕どもの罪を暴かれたのです。」と言いました。人の前だったら「絶対そんなことはしていない！」と言いつつことも出来ると思います。しかし、ここでユダは神様に「降参」しているのではないのでしょうか？これは、私たちもそうだと思います。究極的に私たちは誰の前に立っているのか。誰の前に生きているのか。それが突きつけられます。ユダは、神様の前に立った時に、変わっていったのだと思います。

[3] 神様は私たちを変えて下さる

それは、ユダだけではありません。実は、もうヨセフの心の中も次第に変えられてきているのではないのでしょうか。特にこのユダの、自らを犠牲にする言葉（それは兄弟への愛と父親への愛に満ちていました）を聞いて、ヨセフは自分の中の、自分ではどうすることも出来ない何か硬いものが、溶かされていくと感じたのではないのでしょうか。既に 43 章で弟ベニヤミンに会った時は、胸が熱くなり、涙がこぼれそうになり、奥の部屋で泣いたと書いてあります。…けれども、また泣き顔が分からないように顔を洗って平静を装いながら鬼たちの前に出たとあります。

私は思ったのですが、皆さんもそう思われる方もおられると思いますが、何故ヨセフは、兄弟たちにすぐに身を明かさなかったのでしょうか？見方によってはヨセフは意地が悪いとも、或いは復讐をしているのではないかとも思えてしまいます。そこには、ヨセフの複雑な心があったのではないのでしょうか。それが証拠に彼はエジプトで結婚して子供が二人生まれましたが、初めの子にマナセ (41:51) と名付けました。それは「忘れさせる」との意味だとあります。それは、彼の祈りだったに相違ありません。過去のことを忘れたかった。「神様、この子の誕生を契機に、あの辛い過去を忘れさせて下さい」という、苦悩の深さを物語るものではないのでしょうか。

「忘れたくても忘れられない過去」があるのですね。一見意地悪な仕打ちにみえる彼の振る舞いは、そのことを通して、彼は自分の中の心と戦っていたのではないかと思うのです。心から「再会」したいのです。すぐにも身を明かしたいのです。でも自分をそのようにさせない力もまた働いている。しかし、神様は生きておられます！今、世界的な飢饉という状況を通して、兄たちが目の前にいる。ベニヤミンもいる。父ヤコブもまだ生きているという。ヨセフの心は、ユダの犠牲的な言葉を聞いた時に、温かいものに包まれて氷解したのです。神様が働いて下さったのではな

いでしょうか。その結末は、来週丁寧に見てゆきたいと思いますが、今日のところも実に、私たちの人生の旅路と重なりあって聞こえてくるのではないのでしょうか。

[結] 再会を与えて下さる神

私たちの人生、初めに申しましたように、あることを契機にこれまでと全く違ってしまった人生を歩まされる時があると思います。それは戦争とか、事故とか、そのようなこともあるかもしれませんが、もっと身近な人間関係で危機的な状況に見舞われるときというのも、残念ながらあると思います。しかし、その時、私たちは、神様の愛を知らされている、ということに立ち帰れるのではないのでしょうか？

新約聖書の中で、ある時、弟子のペトロは、イエス様に「主よ、兄弟がわたしに罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか？七回までですか」と尋ねました（マタイ 18 章）。イエス様のお答えは、「七回の七十倍までも赦しなさい」というものでした。完全数の完全数、徹底的に赦しなさい、それは回数の問題ではない。忘れてしまいなさい、ということです。「イエス様、それが出来ないから苦しいのではないですか、そんな非現実的なことを仰らないでくださいよ」と私たちは言いたくなります。私はイエス様はそれを見越して仰っていると思います。「赦す」というのはそんなに簡単なことではないでしょう。けれども、私たちが本当に苦しいのは、「赦せない心」に苦しむのではないのでしょうか？憎しみを持ち続けるということは辛いことなのです。イエス様は、そこから、その心から自由になれる道、極めて現実的な道を私たちに与えて下さるためにこの世に来て下さったのだと思うのです。それは、「あなたの重荷を、そして罪をわたしに委ねよ」という、十字架の招きなのではないのでしょうか？

赦せない心ではなく、「愛」が私たちに内側から変えてくれるのです。憎しみは、いつまで経っても交わることがない、平行線でしょう。「愛」というのは、相手に近づくことです。「国と国」、「個人と個人」も全く同じではないのでしょうか？相手に近づく。これをして下さったのがイエス様です。「私にはできません」と言うかもしれませんが、そうですよね、ですから私たちにイエス様は「主の祈り」を教えて下さったのではないのでしょうか。—「我らに罪を犯す者を我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え」と。「主が赦して下さったように、あなた方も互いに赦し合いなさい」。

「この罪は、恥は、憎しみは墓場まで持っていく」などとよく言いますね。でも、墓場まで持っていく前に、その人と「出会い直す」こともきっと出来るのです。ヨセフが兄弟や親と真に“再会”できたように、新しくされた私としてあの人と出会うことをチャレンジとして、神様は私たちに求めていらっしゃるのではないのでしょうか？私たちを包む大きな神様の愛があることを忘れないでいたいと思います。お祈り致します。